

ナス
(ナス科)

ナス科野菜跡や連作の場合は接木苗で病害を回避する。肥切れさせない、整枝と摘葉をこまめに行う。

作型	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
露地					トンネル	定植	収穫						

1) 適地

高温を好みます。地方品種が多いのも特徴です。耕土が深く有機質に富んだ、保肥力、保水力に優れている土壌が適しています。

2) 品種

中長ナス：千両、千両2号、筑陽、あのみりのり（単為結果性：ホルモン剤なしでも着果する）

丸ナス：早生大丸、賀茂ナス

米ナス：くろわし、くろすけ

3) 作り方

土壌病害が発生するため、必ず接木苗を利用します。

【圃場の準備】定植の1か月前に1㎡当たり堆肥3kg、苦土石灰100g、BMようりん50gを施し、できるだけ深く耕耘します。定植の1週間前に、1㎡当たり緩効性肥料100gを施し、幅180cmの畝を立てます。

【定植】5月上旬から定植することができます。早く植えるのは禁物で、活着も悪くその後の生育にも大きく影響します。定植は畝の中央部に株間60～70cmで1条植えとし、鉢土の上が畝面と水平またはやや盛り上がるくらいの浅植えとします。なお、定植後は苗が倒れないように30cmくらいの仮支柱を立てます。

【整枝と誘引】収穫の盛りになる7月中旬から枝や葉が混み合い、変形果や色つやの悪い果実が多くなってきます。品質のよい果実を長く収穫するために整枝が必要です。整枝は3～4本仕立てにします。3本仕立ては1番花の直下のわき芽を2本残し、4本仕立てにする場合は1番花の上の強いわき芽も1本残します。残すわき芽の下の節になる芽は早めに全部摘みとります。整枝をする頃になると気温も高くなり、生育が早くなりますので、風で倒れないように長さ2mの支柱を枝ごとに立て、ヒモで固定し誘引していきます。このとき、枝を広げて誘引すると、風による果実の傷みを減らすことができます。

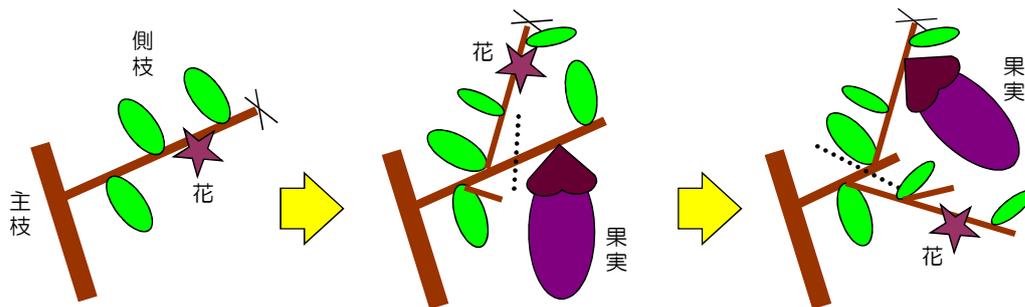


【追肥】収穫が始まったら 15 日おきに、株間や畝肩に高度化成肥料を圃場 1m² 当たり 30g 施し、水をたっぷりやります。花の状態や開花の位置により栄養状態が分かります。雌しべが雄しべよりも長く（長花柱花）、開花位置から先に 4～5 枚の展開葉があると健全でよい果実をつけ、雌しべが短い（中花柱花）または雄しべの中に隠れており（短花柱花）、開花位置から先に 2 枚程度しか展開葉がないと奇形果や落花の原因となります。このような状態になり始めたら追肥の間隔を短くするか、追肥量を増やしましょう。

【灌水・敷きワラ】品質のよいナスを多くとるには、十分な灌水をすることが大切です。さらに土壌表面の乾燥を防ぐため敷きワラをすると効果があります。

【更新剪定】9 月上旬から良品を収穫するため、7 月下旬に主枝と側枝の基部の葉を 2～3 枚残して切りもどし剪定を行い、株の回復を促すため追肥をします。剪定後しばらくの間は収穫ができなくなるので、継続して生産・出荷する場合、選定は植えてある半分くらいの株でまずは行いましょう。

【収穫】収穫が遅れると種子が目立ち、肉質も悪くなります。収穫は図のように 1～2 芽残して枝ごと収穫します。収穫の時にこのように切りもどすと株が混み合いにくくなります。



整枝と収穫の方法

4) 病虫害防除

ナス科野菜（トマト、トウガラシ、ジャガイモなど）の連作は、土壌病害が発生しやすくなるので接木苗を用いるか、新しい畑を選びましょう。

害虫は、アブラムシ類やハダニ類、アザミウマ類などがよく発生するので、混み合った葉や枝を随時取り除くとともに、薬剤防除を行います。病害としては、灰色かび病の発生が多く、梅雨時期の果実の腐敗につながりますので、定期的な防除を行います。



露地ナスの栽培圃場



収穫前の果実